

## 祭礼自粛運動と向き合った時代 — 石川県珠洲市を事例として—

著者	嘉瀬井 恵子
著者別表示	Kasei Keiko
雑誌名	日本海域研究
巻	49
ページ	39-47
発行年	2018-03-26
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00050910">http://doi.org/10.24517/00050910</a>



## 祭礼自粛運動と向き合った時代－石川県珠洲市を事例として－

嘉瀬井恵子<sup>1\*</sup>

2017年9月21日受付, Received 21 September 2017  
2017年12月7日受理, Accepted 7 December 2017

### Post-war cost-cutting governmental restrictions placed on a local festival, and the opinion of residents: the case of Suzu City in Ishikawa Prefecture, Japan

Keiko KASEI<sup>1\*</sup>

#### Abstract

When the Second World War ended in 1945, Japan was in a dire economic condition and the country faced years of recovery. In this context, a festival in Suzu city in the Okunoto area of the Noto Peninsula in Ishikawa Prefecture was deemed wasteful by the local authorities. As such, the central government ordered the residents to economize and refrain where possible when holding “kiriko” festivals. “Kiriko” refers to a festival centered on extravagant, brightly lit and very colorful floats that are all lined up as part of a long parade procession. This study looked at how did the residents responded to the requested simplification of the “kiriko” festivals as set out by the authorities. It also noted the materials and methods that were utilized in order to cut the high costs of holding such festivals.

For example, the residents were told by the authorities, "Do not make lots of festive dishes (gottuo)", "Invite only your relatives to the kiriko festival", and "Do not distribute sekihan [celebratory red rice]". However, this researcher learned the following things after interviewing the city's older residents. Most notably, the residents did not think that the “kiriko” festival is wasteful. In fact, at the time, the residents disobeyed the order of self-restraint vis-à-vis their “kiriko” festival. The residents also quietly rebelled against the various prohibition orders placed on the festival. From the interviews, the sentiment was evident that the only enjoyment for residents at a very difficult time after the war was a festival.

Today, the stories surrounding the “kiriko” festival's restrictions and prohibitions in the years immediately after World War Two have become an opportunity for residents to appreciate more their region and traditions.

**Key Words:** festive dishes (“gottuo”), kiriko-festival, modernization of home, Okunoto area  
キーワード: キリコ祭り, 行事食ごっつお, 生活合理化, 奥能登

<sup>1</sup> 金沢大学地域連携推進センター能登学舎 〒927-1462 石川県珠洲市三崎町小泊33-7 金沢大学能登学舎 (Center for Regional Collaboration, Kanazawa University, 33-7, Kodomari, Misaki-cho, Suzu, Ishikawa, 927-1462 Japan)

\* 連絡著者 (Author for correspondence)

## I. はじめに

戦後、経済的・精神的に日本を立て直すための農村生活の改善の一環として、祭礼の自粛運動が展開した地域がある。このような時代のうねりの只中にいた地域住民にとって、祭礼の継承とはどのような意味を持ったのか。この問いに対し、本稿は行政側の論理や歴史を追うとともに、祭礼の自粛要請によってもなお地域社会における文化継承の位置づけを変えなかった住民側の反応を問う試みである。

## II. 研究の目的

### 1) 問題の所在

本研究の最終目標は、次の2つである。1つは、石川県珠洲市における戦後の祭礼の自粛と向き合った時代を描ききることである。現在、能登半島最奥部の珠洲市の人口は約14,600人で、大正時代よりも少ない。急激な過疎・高齢化が進む反面、伝承されてきた習俗や祭礼からは、古来より続いてきた信仰の深さをみることが出来る。そこで2つめは、祭礼の自粛にいかなる要素と方法が含意され、地域を形成したのかを解明することである。

冠婚葬祭の簡素化をはじめ、官による国民に対する生活改善の要請は明治期に遡る<sup>1)</sup>。広く普及した大正期を経て、さらに戦後は政府や各省庁、自治体、各種団体によって全国に生活改善要請は展開した(田中, 2011)。婚礼衣装の簡素化や公民館結婚式といった挙式の合理化、あるいは葬式料理の簡素化などの改善運動が各地で進む中、これらの要請以上に、珠洲市で繰り返し要請が唱えられたのは、伝統のキリコ祭りの自粛であった。もともと、戦後、祭礼の自粛を要請した自治体は全国には少ないながらも無いわけではない<sup>2)</sup>。ただし、後述するように祭礼の

自粛項目を具体的に示して要請した自治体は、珠洲市が顕著な例である。では、珠洲市の住民にどの程度の負担をかける形で自粛が呼びかけられたのか。このような視点からの考察がなされなければ、生活改善事業の中で祭礼の自粛が自治体によって要請されても、住民の自粛要請に対する態度が不可視化されたままになる。その上で、戦後、都会にも増して経済的に困難な状況を迎えても、キリコ祭りが地域に現に残っている事実が、いかに地域社会の生活と連動しているのかを明らかにする必要があると考える。

### 2) 調査方法

本稿では、戦後の祭礼の自粛が官民挙げて巻き起こった時代に照準をあてる。とりわけ、全国的に展開した生活改善運動のうち施設整備の改善とは距離を置き、地域集落レベルの祭礼の改善・自粛を考察する。したがって、戦後の社会形成の時代を昭和20年代後半から30年代後半にとり、分析の対象とした<sup>3)</sup>。

そこでまず、自治体の広報誌である『広報すず』<sup>4)</sup>や『珠洲市史』などの行政資料を分析の糸口とする。これらの性質上、地域住民に対する行政側の働きかけが把握できる。それが、①赤飯配りの禁止、②近親者のみとどめるヨバレの招待、③酒のふるまい(一人一合まで)、④つまみ程度のもてなし、⑤当日限りの接待、である。これらを追求することによって、地域社会をめぐる関係性や社会との紐帯を捉える住民の態度が明らかになる。

また、当時の住民の祭礼自粛要請に対する行動や表象を把握するため、聞き取り調査を実施した。ただし、当時の記憶がある世代を選定したため、現在60～70歳代の住民が中心となったことを予め述べておく(表1)。

表1 聞き取り調査の対象者の属性と時期。

Table 1 The Interviewee's attribute of the interview survey and time.

	年代	性別	聞き取り日		年代	性別	聞き取り日
Aさん	70代	女性	2017年3月8日	Fさん	70代	女性	2017年3月8日
Bさん	60代	女性	2017年2月11日	Gさん	70代	男性	2017年6月21日
Cさん	70代	男性	2017年2月11日	Hさん	70代	女性	2017年2月11日
Dさん	80代	女性	2017年6月15日	Iさん	70代	女性	2017年8月25日
Eさん	70代	男性	2017年2月7日	Jさん	90代	男性	2017年9月9日

### 3) 研究の目的

奥能登地域の人々はあまめはぎ、もっそう祭り、あえのことなど、様々な信仰を重んじてきた。本稿ではそれらの1つ、珠洲市で毎年、夏から秋にかけて行われるキリコ祭りを事例とする。今日までキリコ祭りは息づき、2015年、日本遺産に認定された。

このキリコ祭りに欠かせない慣習に、ヨバレがある。ヨバレとは親戚や知人、通りすがりの人をも自宅に招き、赤飯、煮しめ、茶碗蒸、酢の物、昆布巻などの御馳走（以下、方言の「ごっつお」と記す）を、輪島塗の御膳でもてなす慣習である<sup>9)</sup>。ヨバレに招待された場合、招待し返す風習であるため、隣接する集落では同じ日に祭礼を実施しない。客人が帰る際は、ジュース、果物、菓子などを入れたコブタと呼ばれる土産を持たせる。神様からの裾分けとされるコブタに入れる品数は、縁起をかつぎ、割り切れない奇数とされている。

本稿の目的は、このような地域文化とともにいる住民が、戦後の社会改革の中でどのように祭礼の自粛要請と対峙したのかを考察することにある。このような考察をなぜするのか。それは、地域における祭礼の意味と住民の意思決定との関係性に着目した時、この時代の住民の行為がいわゆる生活改善運動の一通過点ではなく、現在に至る文化継承の軌跡であると示せるからである。祭礼を冗費とみなして自粛が要請された時代、住民の態度がどのようなプロセスの中にあったかをみることで、今後の地域文化を継承していく上での手がかりとなると考えられる。

ところで、近年の祭りに関する研究では、少子・高齢化の視点から継承の困難性に言及したものが顕著にある。奥能登のキリコ祭りに関しては、熊澤（2011）が祭礼文化の衰退の要因として「社会基盤の変化」、「就労体系の変化」、「関心の低下」、「合理化」など、6点指摘している。「合理化」については、祭礼の開催日時の変更や、御膳などの道具の簡素化といった、日時と道具の2つの要素に影響を与えたと分析する。特に道具への影響については、家政学でも同様の指摘がある。また、調理学会では平成21～23年度の特別研究「調理文化の地域性と調理科学—行事食・儀礼食—」で全国各地の行事食の簡素化について論考を加えている。

本稿でも「合理化」に言及しているが、論点は「戦後の生活改善における合理化」であり、それが行政

による祭礼の自粛として表出したことに対して、住民がどのように対峙したかにある。つまり、人々の行動や思考が多少とも行政の施策に包摂されたのか。あるいは包摂されなかったのか。この過程において、どのように祭礼の自粛と向き合ったのかを捉えようとするものである。

## Ⅲ. 生活改善と祭礼の自粛

### 1) 生活改善における合理化の展開と農耕社会

明治期以降、海外の制度や生活習慣を日本で採用するため、国民に対して生活改善を推進することが新政府の方針であった。生活改善については、過度な婚礼や葬儀の簡素化、台所様式や家事作業などの前近代的な「生活の合理化（水谷、1955；喜多、1952ほか）」が、重点政策として進められた。

1919（大正8）年文部省（現在の文部科学省）の主催で生活改善展覧会が開催され、1920（大正9）年には文部省社会局に国家的利益と産業効率の向上を目指し、生活改善同盟が開設された。生活改善同盟は衣・食・住・社交・儀礼など、日常生活における一切の冗費を省くべきだと主張した。生活改善同盟の調査委員であった今和次郎は、農村の祭礼について「親戚縁者が集まり、そのたびに昔のとおり飲み食いの行事を、しきたりどおりに、疑う余地がないもののように型どおりにやることの吟味が、科学し反省せずにおれることなのか。神様のことだから、仏様のことだから科学すべきではない、伝統を重んずべきだとして続けるならば、それが、国を滅ぼす基となる（今、1990）」と疑問を呈した。今に言わせれば、生活改善の効果がみられない原因とは「家族関係にかかわる封建性、つまり非近代性」（今、1990）にあるとみる。要は、封建的な農村家族の関係性の向上に、まずは目を向けるべきというのが今の見解である。だが、生活改善同盟らが新しい時代に即した社交儀礼の改善を目指し、前近代的生活を「寧ろ罪悪（生活改善同盟会、1929）」とみる論潮には批判もあった。その一人、柳田国男は「所謂生活改善、即ち生活方法の計画ある変更、果してどの位まで新し味があり、又この時代の尚古趣味、乃至はあらゆる改革に対して不安を抱かうとする階級の批判に拮抗して、果してどの程度にまで現代日本の文化を価値づけることが出来るか（柳田、1962）」と述べる。

同様に農林省（現在の農林水産省）農業改良局長の小倉武一は、冠婚葬祭の簡素化などに対し「活きる農家ということを考えての上かどうかは甚だ疑問（農林省農業改良局、1952）」と断じる。つまり、柳田や小倉は、生活改善という施策に対しては農村地域でいかに活きるかといった精神的、文化的価値にこだわりをみせる。

しかし、戦後復興期の生活改善と民主化の議論は、往々にして農村婦人による堅実な生活の実践と関連づけられた。

## 2) 石川県・珠洲市の婦人会・公民館のうごき

戦後の農村生活の改善の取り組みは、常に内政の重要な課題であった。1948年（昭和23）年、能率的な農法の発達、農業生産の増大や農民生活の改善、農民に農業に関する知識を付与することを目的として、農業改良助長法が施行された。同法の整備として、農林省に先述の小倉武一が所属した農業改良局生活改善課が設置された。以後、農民生活の改善の取り組みは、国だけではなく自治体、さらに地方の農山村地域へと広がっていった。

戦後復興期、民主化の実現と明るい生活目標を掲げたものの、教育制度の拡充だけでは地方の改革までは難しい。実生活に即した文化と教養を求めて1949（昭和24）年の社会教育法の制定に伴って設置されたのが公民館である。以後、1953（昭和28）年の町村合併促進法までの4年間で、石川県内の公民館活動の幅は着実に伸びた。1951（昭和26）年に「生活改善協議会」が発足すると、公民館では生活福祉活動の担い手である婦人団体の育成に力を入れた。そして地域の民主化運動を進めるべく、祭礼の自粛に関する公民館事業は昭和20年代中旬から30年代初頭までの間に、「祭礼経費実態調査（上戸地区）」、「祭礼自粛運動展開（同）」、「祭礼冗費節約運動（三崎地区）」、「祭礼節約運動（同）」、「祭礼費節約運動（若山地区）」といった事業が、珠洲市10地区のうち9地区で実施された（珠洲市教育委員会、1957）。

一方、珠洲市では若者が出稼ぎで地元を離れた昭和20年代、山車の担ぎ手がおらず、若山町南山、同町宗末、宝立町春日野宝住寺、昭和30年に若山町広栗、同町上山、宝立町泥木で祭礼が廃止された。本来、文化継承の見方に立つならば祭礼の継承が危ぶまれるはずであろう。だが、生活改善の風潮がそう

はさせなかった。珠洲市の各地で、祭礼の自粛を提唱する団体が組織されたのである。1952（昭和27）年、第1回珠洲郡社会教育研究大会を開催し、各町村の女性たちは生活改善については、「むだづかいのならわし」を改め、「お祭りについて、けい費のかからぬ楽しみを新しく考えていこう」と決議した（珠洲市編さん専門委員会、1980）。昭和30年度の珠洲市の社会教育目標に至っては「経済生活の合理化と生活改善運動の指導」を掲げ、生活改善は大衆運動の様態をみせた。市内に10館ある公民館では、婦人の意識の低さを向上させる目的の講座が開設されていた。婦人の役割は、およそ家計と生活の向上に必須条件となる。

このように国による生活改善が地方自治体を巻き込んで導く意図は、地方の青年団や婦人会などから、農村婦人にも広がっていった。

## 3) 農村婦人問題と祭礼の自粛

ここに豊作祈願を目的に独自性や伝統を保った祭礼の改善と、農村婦人の労働の負担問題が結びつく<sup>6)</sup>。祭りの数日前からごつつおを準備し、輪島塗の御膳での配膳までを全て家庭の主婦が行った。ましてや祭礼日であっても、農作業の手を休めることは出来ない。主婦には祭り見物の暇はなく、ヨバレのもてなしは明朝まで続く。ごつつお作りの世代交代をして初めて、家の前の道をキリコが通る光景を見たという婦人は多い。

実際の問題として、生活改善を提唱したところで農村婦人は「働く道具（喜多、1952）」と称されるほど、地位は低いままであった。それを示す広報に掲載されたコラムをみてみよう。「古い因習にとざされて牛馬の如く立忝く農村婦人」と描写し、「朝は早く起き夜はおそくまで仕事をする主婦、男にいわれるままに黙ってひきまわされている・・・一体、これでよいのだろうか」（昭和35年6月1日号の『広報すず』）。このコラムは次のことを示している。それは「能登のととらく」との言葉にみるような妻<sup>かか</sup>が働き、<sup>とと</sup>夫が楽をする能登独特の地域の封建的風土である。これこそ、今（1990）が、断じた農村の姿であった。この「ととらく」の解決の道と目された策が、祭礼の自粛であった。

しかし、本来、生活改善の眼目は農村生活の向上にあったはずである。ここで判明するのは、昭和37

年5月1日号の『広報すず』で、「何をいってもお客様をもてなす費用の節減と、それにともなう婦人の軽減にある」と訴えたように、生活改善の理由が婦人の労務問題として尖锐化していく点である。確かに、ごっつおの御膳の片づけだけでも多大な労力を要する。Aさんは「1年間片づけてある御膳を出してね。朱塗りの御膳を出して、それを洗ったり、拭いたりね。それにやっぱり時間がかかって」という。昭和30年代の祭礼の自肅要請では、家計の健全性と婦人の労務とが相補的に結びついているのである。

#### 4) ごっつおの冗費問題とその合理的改善

祭りで曳く山車は、地区ごとではなく数軒の集落ごとに倉庫にしまい、代々受け継いできている。約20年前までは、倉庫での管理費を積み立てる講があったとBさんは言う。このほかにキリコ祭りの実施には、神主に祝詞をあげてもらうための宮代、ヨバレでふるまわれるごっつお代、輪島塗の器物の代金や祭りで着用する衣料代などの経費もかかる。先に触れたように、昭和27年の第1回珠洲郡社会教育研究大会で「けい費のかからぬ楽しみ」が強調されたのはこのような事情からであった。

しかし、その後、料理などのもてなしに関することが、ことさら冗費とされた。広報誌で強調された「赤飯配りの廃止」、「酒は一人一合まで」、「つまみ程度のもてなし」といった内容がそれである。現金収入の少ない自給自足の前近代的生活においては、「よそへの見栄、世間体」(水谷, 1955)の改善こそが全国的な課題であり、珠洲市の課題でもあった。昭和30年8月5日号の『広報すず』では、「祭礼の自肅改善運動」との見出しを載せ、啓蒙運動の様相をみせた。それによれば「赤飯配りは禁止する 招待の範囲は近親者にとどめる 献立は簡素なもの三品以内とする お酒は一人一合程度とする 来客の招待は当日限りとする」などの自肅を強行したところ、昨年より一戸平均で約2,000円の節減であったという<sup>7)</sup>。また、前年の昭和29年の一戸平均の祭礼経費について赤飯450円、酒720円、ビール240円、副食物などの経費を併せて平均3490円に上ると掲載した。昭和31年7月15日号の『広報すず』では、「明るい生活のために」と題し、ここでも赤飯配りや酒量の制限を要請した上で「料理はつまみ程度に簡素にいたしましょう」と提起した。昭和33年9月1日号の『広

報すず』では「見栄のはつたご馳走はやめましょう。主婦を過労から解放しよう」などと掲載し、見栄、過労の文言で知らしめている。さらに昭和37年5月1日号では、祭礼の平均支出額に7,000~11,000円かかると掲載して自肅を求めた<sup>8)</sup>。そして、昭和37年9月1日号の『広報すず』では「連日連夜祭りを追つてねり歩き、仕事も何も手につかないふやけた、だらしのない月になりがち」と掲載し、「たわいのない虚礼や見栄」といった品格や道德面を問題視した。

広報誌だけではなく、産業青年学級の昭和35年度の一般教養科目でも、「村の地域的な祭礼が不経済であることを理解する」と「酒類の経費が多であることを知る」とのテーマで開催している(珠洲市教育委員会, 1960)。昭和30年度の珠洲市の母親学級でも「家庭生活の中に無駄がないか知る(見栄、世間体、義理)(珠洲市教育委員会1957)」との講義を開いた。

つまり、生活改善の一環としての祭礼の自肅要請とは、婦人による冗費の節減と同時に見栄や世間体を克服するといった民主化の一形態であったといえる。

## IV. 考 察

本章では、珠洲市における戦後の祭礼の自肅運動の展開に則して、農村社会の住民の心性を探りたい。そこで考察するのは、行政側が特に冗費の根源として自肅要請した、①赤飯配りの廃止、②近親者のみにとどめるヨバレ招待、③酒のふるまい(「一人一合程度」)、④つまみ程度のもてなし(3品以内)、⑤当日限りの接待、の5点である。

これらから分かることは、地域に残る古い慣習こそが自肅要請された点である。だからこそ、これらを考察することによって、運動としての祭礼の自肅が意味をもたらしたのかを問いたいのである。

1) 「赤飯配りの廃止」とどのように向き合ったのか  
これまでみてきたように、専ら自治体政策による祭礼の自肅とは、農村生活の合理化であり、婦人による冗費の儉約であった。

問題とされたのが、祭礼の日の朝に行う赤飯配りである。Bさんは、「祭りの朝、母ちゃんらは赤飯を炊いて、その赤飯を持ってヨバレに招待する家々を

回って夜に祭りがあることを知らせたの」と、祭礼日当日の伝達の意味だと説明する。主婦は早朝4時頃から赤飯を蒸し、お重に詰めて徒歩で祭りを伝達したという。しかも、午前中には赤飯配りを終わらせて、夜のヨバレのごっつおの支度にとりかかる。

だが、赤飯配りは伝達の役割だけを意味しない。Cさんは「この家には不幸があって、今年はヨバレには来られんやろなという家にも配った」という。またAさんは「自分たちのね、娘さんとか。親さんの本当の濃いっていうか。本当の濃いところって全員がおヨバレに来ないじゃないですか。そのために赤飯だけでもあげるって」と娘や親戚への配慮を意味したという。続けてAさんは「神様にあげなくてはならない、仏様にあげなくてはならない。ほら、赤飯を蒸すと神棚にあげるでしょう？もちろんお酒もあがっているし」と言う。このように住民は、赤飯を配って初めて神や仏の恩恵に与ると考えたし、先祖への義理が果たせると考えている。これはⅢ章でみた、神や仏を理由に伝統を重んずることを断じた今（1990）の見解と相反した思考であることは、押さえておきたい。

住民には、喪中の知人や外出のままならない嫁いだ娘にも赤飯を配ることで、彼らにも自分たちと同じ神の恩恵を与らせようとの意図があった。そこに、やみくもに赤飯配りを自粛することへの躊躇の姿勢がある。

## 2) 「近親者のみにとどめるヨバレ招待」とどのよう に向き合ったのか

昭和30年代、『広報すず』では「招待客は近親者にとどめましょう」との記事が掲載されていく。また、昭和33年9月21日付の地域新聞の『珠洲新聞』では、「親類以外の来客は遠慮してもらうこと」と掲載した。ここで読み取りたいのは、誰それとなく客人をもてなす寛容な習慣の否定である。

当時、婦人会が力を付けてきたことは既に述べた通りであるが、昭和35年、上戸地区の婦人会では565世帯（有効255枚、回収率45.1%）を対象に、祭礼経費の実態を調査した（珠洲市教育委員会、1960）。調査の実施をした理由について「多くの無駄をしていると思われるような事は改めていついつまでもお金が尾をひくような事はやめるべき」としている。そこで、来客数の削減策に出たのである。この調査で

は、一戸あたり平均12名の来客のうち8割が親戚で、その数も年々減少しているとみている。親戚以外では知人が3名程、見知らぬ飛入り客も1人は招いているという調査結果に対し、婦人会は「職域関係の相互の招待の自粛、市内各公民館の祭礼自粛の呼び掛けが一段の効果を表している」と分析し「呼び掛け倒れになろうと継続したい」としている。しかし、当時の婦人会の調査内容を示しつつ筆者が行った聞き取りでは、「当時100名近い人がおいでです」とのDさんの指摘をはじめ、調査結果に疑問を示す住民が多かった。このような齟齬の要因については、生活改善を主導する立場であった婦人会が行った調査かつ分析である点が原因だと推察される。

一方で、Cさんのように「自粛があった記憶はあるけど、飯田（筆者補足；別の集落）の話だと思っと思った。だって、子供同士でヨバレに行ったもん」と子供同士でヨバレの約束を交わしたという住民もいた。また当時、祭礼の自粛要請を覚えているEさんは「楽しみといたらヨバレしかなかったの。子供はコブタっていう果物やお菓子のお土産を楽しみにしていたから。せめて子供だけでもということで、子供をヨバレに行かせた親もありましたよ」と振り返る。

このように、楽しみの少ない時代、親は祭りの楽しみを子供から奪ってしまっただけでよいかということへの問いまでは棄てていなかったと思われる。だから、自粛要請に抗ってでも子供には祭りに行かせ、招いた家はコブタを持たせたのである。親として自粛とどう向き合うかを考えた住民がいたことが分かる。

## 3) 「酒のふるまい（一人一合まで）」とどのよう に向き合ったのか

住民は、珠洲には「何もない。地味です（嘉瀬井、2017）」という。地味な地域の中にも、住民には米どころと酒どころであるとの矜持がある。Fさんは「ここは能登杜氏の酒どころなのでね。一人一合なんてことはないです」という。また、Jさんの「酒には米のね、田の神様、命の神様が宿っているから、冗費なんて考えはない、ないない」というような社会心理に基づいた解釈は強力に存在した。だからといって、住民が田や米の神の意味世界を受け入れ、それに見合った行動をしているだけかというところではない。たとえば文化人類学者の渡辺欣雄は「宴とは

何だろう」と自問し「祭りの中心、祭りの終り、祭りのあとに行われる共同飲食であり、共同飲食でも、その中で占める酒盛＝<sup>さかもり</sup>宴であり、くつろぎ休み、<sup>たの</sup>宴しむことである（伊藤・渡辺，1975）」と答える。ここで神崎（2005）の適切な言葉を借りれば、祭礼とは「儀礼的に粛々と飲む正座（礼講）と、それを終えたあとの後座（無礼講）の二重構造」である。具体的に敷衍すると、前者はJさんのいう神とその加護を信じる人との関係性であり、後者においては集落の住民同士の<sup>たの</sup>宴しみの意味になる。Aさんは「男性の方とか、お祭りだけとか、たくさん飲むというそんな機会もなかったから。そんだけ（筆者補足；婦人会に）言われても全体が聞くってそんなものでもなかった」と述べる。また、Gさんが「無礼講、飲まなきゃ失礼やろいに」と述べる時、そこには二重構造が相互補完的に作用している。

#### 4) 「つまみ程度のもてなし（3品以内）」とどのよう に向き合ったのか

昭和初期までの能登のごつつおは、本膳と二の膳で提供していたことがわかっている（守田編，1988）。昭和35年度に実施した上戸婦人会による「お祭りの経費の実態調査から」をみる限り、昭和28年に比べて昭和35年では料理関連の総額は増額し、自粛は進んでいなかったと判断してよい（表2）。当時の住民が、経費削減をうたう婦人会の調査に対して正確に

回答していたかは不明である。だが、平均7、8品の提供があるとの結果からは、御膳にのる椀の数を勘案すると自粛の時代でも本膳と二の膳で提供し続けていたと推測される。

当時、Iさんのように「少なくとも本膳には野菜の煮物を乗せるお平、汁物、焼物を乗せたオザシの3品は出してたよ」との証言は、聞き取り調査をした全住民からあった。ただし、地域ごとに収穫できる食材が異なるため、お平には煮物に替えて栗饅頭にしたり、汁物の具が山村では豆、キノコ、漁村では魚のすり身で提供するといった違いがみえた。このように、もてなしの要素に料理への姿勢や配膳だけでなく、地域食材をふるまおうとする心を含めて整理すると一層、説明は鮮明になる。

戦後の代わり映えのない日々の中、祭りごつつおが唯一の楽しみであったとHさんはいう。それは「今のように茶碗蒸なんていつも食べられないけど、ヨバレの時は出るので楽しみで」あったからである。また、Eさんが「どんなに貧しくても膳を揃えることが所帯を持つことだといって、輪島塗の御膳を父が揃えましたよ」と述べるように、集落では毎月、数軒まとめて掛金を積み立てして輪島塗の御膳を購入したという。それは、輪島塗の御膳で客をヨブことが、地域での存在意義を確かめる上では意味を持つからである。

表2 昭和35年度上戸婦人会による「お祭りの経費の実態調査から」。

Table 2 After "Investigation into expense of the festival" by the 1960 Uedo Women's Society.

	昭和35年(%)	平均額(円)	昭和28年(%)
料理関連総額	82%	4,719	73%
料理 (品数)	47%(7.7品)	2,706	21.6%(5.6品)
酒類	22%	1,263	データなし
赤飯	13%	750	データなし
器物	4.7%	267	6.9%
衣料, 化粧他	4%	267	6.9%
小遣い	2.6%	148	3.3%
宮, 曳山経費	5.7%	329	7.3%
その他	1%	59	0.6%
計	100%	5,775	100%



#### 5) 「当日限りの接待」とどのように向き合ったのか

接待は当日限りとするとの自肅要請について、夜祭りを慣例としてきた住民の心性を考察するにあたり、まず、祭礼の流れを確認したい。たとえば某地区の祭礼の場合、21時にキリコが神社に集結し、22時に神社を出発する。夜が明けるまで町内を巡行する間、各家庭ではヨバレをしながらキリコが自宅の前を通るのを待つ。神輿が火渡り儀式をした後の翌朝7時キリコが神社に入宮する。では、この一連の行事がなぜ、それほど重要なのか。Gさんは当時を貧しい日常の中にも、「キリコを出しとる人らは遅ければ遅い程、なんか誇りやったな。1軒1軒に神様が回ってんやけど、神輿が少しでも長くおることが、その家が幸せになるみたいな考え方があって」と、夜を明かしてでも神の加護を集落の家々で分かち合ったと振り返る。

また、珠洲市では昭和25年に台風被害、昭和35年と39年に台風とウンカ虫発生のため、秋祭りを自肅している。しかし、Jさんが「祭りには災害に対する怒りだけでなく、農作の喜びを住民同士が分かち意味がある」と言うように、喜びを分かちことにこそ祭りの意味があるため、山車を出さない「あご祭り」という方法を取ってでも、家々に祈りを捧げたという。

つまり、住民の誇りや幸せの認識と、行政側の成文化した自肅要請との間には格段の差が存在している。

#### 6) まとめ—自肅と「合理的」意思決定

戦後の行政の見方では、祭礼は冗費という問題軸の中でのみ捉えられてきた。再考すべきは、当時、住民は祭礼の自肅とどのように向き合い、その結果、地域に改善をもたらしたかである。

住民にとって祭礼は、日常の外にあるものではない。それが故にFさんは、「ごっつおとはもてなし」と言い、「もてなしとは、女の態や」とAさんは言い切る。では、Aさんが、女の態によって、意味したものとは何なのか。ヨバレにおける女性の役割を考えると、女の態としての祭礼への関与とは、ごっつおでのもてなしに他ならない。冷蔵庫がない家庭も多い時代、食べ物の腐敗に気を配りながら、地域で採れた野菜や海産物を調達したと住民は口々に言う。それでも食材が足りず、塩蔵の保存食を祭りの

数日前から塩抜きして準備したという。Aさんは「(筆者補足；御膳にごっつおを) きれいにして並べとくっていう。それがすごく、何ていうか。ちょっとの時間がものすごく忙しいねえ」と言いながらも「やりがいがある」と答える。行政が自肅の根拠の一つとして挙げたのは、ヨバレにかかる婦人の労務の問題であった。だが、女性たちにとって祭礼とは、先述したように「牛馬の如く立伏く農村婦人」と呼ばれながらも、労務の問題として捉えているわけではなかった。また、Fさんが「(筆者補足；ごっつおの) 彩りきれいやなあとか言われたりすると、来年も作ろうかって」と述べたように、祭礼とは自身がキリコ祭りに関与することへの自負であった。つまり、女の態とは、女性としての役割を表現するものであり、なおかつ自肅要請に対する抵抗の拠点であるといえる。

このように、珠洲市では都会にも増して生活が困窮した戦後の復興期においても、当時の住民が祭礼の自肅をそのまま受け入れたわけではない。祭礼の自肅要請という課題に直面した住民の意識の中には、信仰や文化、歴史的価値のみならず、地域社会の紐帯が規範としてあった。つまり、住民は行政による「考え工夫する生活態度の啓培(昭和31年7月15日号『広報すず』)」というねらいとは異なる判断をしたのである。それは、昭和44年6月1日号の『広報すず』の「冠婚葬祭はさほどの冗費節約の威力を發揮しませんでした」との婦人会の見解が適格に示している。

#### V おわりに—祭礼と地域との関係性の視点

戦後復興期、珠洲市では行政が住民に対し、「なぜお祭りが改善されなければならないか(昭和37年5月1日『広報すず』)」と、推し進めた祭礼の自肅要請は、住民の意識とはすべからず乖離するものであった。この過程において住民は、地域集団としての生活論理を無意識のうちにも身体化していった。

では、当時の伝統的な紐帯や慣習が人々の行為をそのまま支配して、今日まで続いたのかというところ決してそうではない。地域の人々は、行政による祭礼の改善要請という外からの枠づけと向き合いつつも、自肅に対しては絶えず自分たちで慣習として組成していった。つまり、その当時の地域社会の在り方と住民の心情が一体化し、文化として継承されている

のである。このプロセスを経た今、祭礼文化が地域生活にどう活かされたかという現代的意味<sup>9)</sup>も確認すべきであろう。それについては別途、報告したい。

謝 辞：本稿の一部は、公益財団法人アサヒグループ学術振興財団の研究助成を賜り実施したことを記し、ここに感謝の意を表します。また、聞き取り調査をお受け下さった地域の皆さまに御礼を申し上げます。

## 注

- 1) 『東京朝日新聞』の明治42年6月7日付に、「生活慣習や生活様式の悪いところを改めてよくすること」として、生活改善の語句がある。
- 2) 例えば、岐阜県高山市、佐賀県伊万里市でも祭礼の自粛を促したことは、高山市婦人会や伊万里市広報の当時の記録で確認している。
- 3) 昭和40年代には、農村生活にも改善の兆しが見えたとして全国的に生活改善不要論が高まった。珠洲市も昭和40年代は公民館での祭礼自粛の関連事業数も飯田、若山、上戸の3館に減った(珠洲市教育委員会, 1965)。昭和49年生活改善推進委員会を結成し、祭礼の改善については、「1. 二の膳、コブタは廃止とする。2. 職場での儀礼的な交流は廃止する」の2点の申し合わせに留めている(昭和49年4月1日号, 同年10月1日号の『広報すず』)。この時代以降は、1965(昭和40)年、法立地区鶴飼婦人学級では栄養士による「祭りに使う料理」の実習を実施し、1967(昭和42)年には蛸島地区婦人会が「祭礼用料理実習」を開催するなど、ごっつおの文化的側面が注目されていく。
- 4) 昭和29年7月15日、珠洲市の発足を機に『弘報珠洲』を発行している。昭和30年4月20日号で『広報珠洲』、昭和33年5月13日号で『広報すず』に変更した。本稿では混乱を来す恐れがあるため、『広報すず』に統一する。
- 5) ヨバレの記録では、隣接する輪島市の住吉神社の370年前の『正保三年当社祭礼定書』が古いとされている。
- 6) 婦人、主婦、女性の定義の違いはあろうが、本稿では同義とする。また、本稿はジェンダー論、フェミニズムの課題とは通底するものの、それらの問題の立て方と論点が異なる。
- 7) 戦後の物価水準について、総務省統計局の消費者物価指数を元に換算、2015年を100とすると昭和30年は17で、

現在にして11,762円の節減である。

- 8) 当時の消費者物価指数は20.5である。現在の金額で53,658円である。
- 9) 珠洲市では地域活性化のツールとして、ヨバレ体験ツアーや、味を競うまつり御膳のイベントなど種々企画している。よって観光資源としての祭礼の捉え方がある。

## 文 献

- 伊藤幹治・渡辺欣雄, 1975: 宴. 弘文堂, 東京, 210p.
- 嘉瀬井恵子, 2017: 地域らしさの再考—奥能登地域を事例として. 日本海域研究, 48, 57-62.
- 神崎宣武, 2005: 「まつり」の食文化. 角川学芸出版, 東京, 241p.
- 喜多壮一郎, 1952: 民主化と生活改善・里山漁村の生活改善読本. 選挙協会, 東京, 40p.
- 今和次郎, 1990: 家政論(今和次郎集第6巻). ドメス出版, 東京, 542p.
- 熊澤栄二・堀内美緒・四方葵・佐々木理沙, 2011: 奥能登珠洲における地域づくりに向けた祭礼の衰退原因の分析. ランドスケープ, 74, 667-672.
- 水谷剣治, 1955: みんなでやる生活改善・第2部. 富民社, 大阪, 316p.
- 守田良子編, 1988: 日本の食生活全集17 石川の食事. 農山漁村文化協会, 東京, 384p.
- 農林省農業改良局編, 1952: 改良普及員叢書 普及員の仕事 普及だより論説集. 農業改良局, 東京, 222p.
- 生活改善同盟會, 1929: 実生活の建直し. 宝文館, 東京, 414 p.
- 珠洲市編さん専門委員会, 1980: 珠洲市史第6巻通史・個別研究. 珠洲市, 994p.
- 珠洲市教育委員会, 1957: 珠洲市社会教育の概要—昭和32年度. 珠洲市, 168p.
- 珠洲市教育委員会, 1960: 珠洲市社会教育の手引—昭和35年度. 珠洲市, 88p.
- 珠洲市教育委員会, 1965: 昭和40年度社会教育の概要. 珠洲市, 163p.
- 田中宣一, 2011: 暮らしの革命 戦後農村の生活改善事業と新生活運動. 農山漁村文化協会, 東京, 450p.
- 柳田国男, 1962: 木綿以前の事—昔風と当世風, 定本柳田国男全集14. 筑摩書房, 東京, 511p.
- 輪島市誌編纂専門委員会, 1974: 輪島市誌資料編第3巻古代・古文獻資料. 輪島市, 640p.